

私は妻にプロポーズをした記憶がない。

「あなたは、『結婚してください』の一言もなく、私と一緒になっちゃったんだから」  
 今でも時々、妻はこう言っていて私をなじる。「今からでも遅くないから、何か言ってみたら？」  
 そう言われたこともあるが、そこで気の利いたことを言えるくらいなら、最初から何か言っている。私は生来、口下手なのだ。

ただ、結婚を決意したきっかけの言葉は、はっきりと覚えている。  
 それは妻の言葉ではなく、妻の父、つまり私の義父が発した一言だった。

学生時代に始まった二人の交際は三年目を迎えていた。私も彼女も社会人になっていた。  
 ある日、いつものように待ち合わせのために入った喫茶店で、約束の時刻に私に声を掛けてきたのは、彼女ではなく店員だった。

「シラサワ様ですか？ 先程、〃伝言の依頼の電話がありました・・・」

依頼主はもちろん彼女だった。

伝言の内容は、彼女の父が倒れて緊急入院したので今日は会えない、ということ。  
 携帯電話などなかった当時、私はすぐさま公衆電話で彼女の実家の番号に掛けた。電話では何度か話したことがある彼女の母が出て、容態はそれほど悪くないこと、夜間付添いの準備のために娘と交代していま帰宅したこと、などを教えてくれた。私は病院名と病室の番号を訊き、そちらへ向かった。

病室に入ると、彼女の父は点滴を受けながらぐっすりと眠っていた。彼女はその傍らで、なんでもない、といった顔をして座っていた。私は彼女の横に腰かけ、そっと手を握った。  
 彼女の頬にひとすじ、涙がこぼれた。

それが、私と、彼女の父との、初めての出会いだった。

彼女の父はもう何年も内臓を患っていた。良くなったり、悪くなったりを繰り返しながら、その都度体力は少しずつ低下してきていた。今回のように入院するほど悪化したのは初めてだったが、幸い、十分な安静と栄養で体調は順調に回復し、一週間後には退院することができた。

退院の日、私は車を出して、彼女とともに病院まで迎えに行った。退院手続きを手伝い、彼女の自宅まで連れ帰った。起きている彼女の父と接するのは、この時が初めてだった。私は少し緊張する手でハンドルを握った。

彼女の父も、どちらかと言えば無口なほうだった。後部座席にもたれて、隣に座る娘に、

病気の事や、入院中の出来事を、ぽつり、ぽつりと話していた。

自宅に着くと、彼は明らかにほっとした様子だった。ソファーにゆったりと体を預けて、くつろいだ姿勢で彼女の母と話をした。私は、確かに娘の恋人ではあったが、家族の一員ではない。久しぶりの家族水入らずの場面に間違つて紛れ込んでしまったような、なんとも言えない居心地の悪さを感じていた。

お昼は、彼女が自家製の手打ちうどんを茹でることになった。具を採ってくる、といつて彼女は麦わら帽子をかぶつて外に出た。庭というには広い、でも畑と呼ぶには少し小さな菜園で、彼女は茄子や紫蘇を摘みはじめた。私は縁側に佇んで彼女の所作を眺めていた。気づくと、傍らに彼女の父が立っていた。

「タケシさん」

「はい」

「今日はありがとう」

「いえ、こちらこそ、折角の日にお邪魔してしまつてすみません」

私は彼女の父のほうを向いて頭を下げた。顔を上げると、くつきりとした横顔が見えた。その視線の先で、彼女の麦わらが揺れていた。

「タケシさん」

「はい」

「ハルカはね」

彼は娘の名を言った。私は、それに続く言葉を想像して、俄かに緊張した。一瞬の間があつて、彼はこう続けた。

「いい子だよ」

その言葉は、ふわり温かくふくらんで、私を包み込んだ。私は、彼と並んで、彼と同じように麦わらの揺れる様を見つめたまま、「はい」と言った。

私を、「家族」に招き入れてくれた、彼の一言だった。

実は、私が義父と交わした言葉は、数えるほどしかない。

次の一年間、私は仕事の都合でアメリカにいた。六か月目に一時帰国して再び彼女の実家を訪れた時、彼の病状は明らかに半年前より進行していた。慌ただしく結納の席がセツトされ、次に私が帰国する予定日の直後に、結婚式が予定された。

だが、その日を待つことなく、義父は逝った。五十一歳だった。

いま、私と妻の間には、四人の子がいる。義父は、彼らの誰にも会うことはなかった。もし元氣であったなら、きっと孫たちの頭を撫でて「いい子だね」と言っていただろう。

そう思いながら子を育てるうち、いつしか義父の言葉は、私の口癖のような言葉になっていた。

「いい子だね」

なんでもない言葉である。しかし、なんでもない言葉だからこそ、あの日の私をとらえた言葉である。いい子だね。呟いて、子どもたちの頭を撫でるたび、あの日の義父がふつと姿を現しているような気がする。

「結婚させてください」とか「お嬢さんを幸せにしてみせます」などと言ったわけではない。また、「娘を頼む」と言われたわけでもない。そんなドラマチックな台詞の代わりに、無口な義父が残してくれたなんでもない一言が、今でも私たち夫婦を、そして家族を、結びつけてくれている。